

別紙 4

報告番号	※	第	号
------	---	---	---

主 論 文 の 要 旨

論文題目

バウムテストの「ゆらぎ」の構造

氏 名

佐渡 忠洋

論 文 内 容 の 要 旨

研究内容と目的

心理臨床の一技法であるバウムテストは創案から半世紀以上を閲した。今日、日本では臨床現場で最も活用頻度の高い技法となり、800 編を超える論文が刊行されている。しかし、先行研究を鑑みる限り、主題であるバウム（実のなる木）それ自体の理解を深める試みは、あまりなされてこなかった。

眼前で描かれた「(一本の) 実のなる木」を、治療的に意味ある形で受け取るには、膨大な先行研究で示唆された知見を援用することと、自らをバウムと描き手にコミットメントさせて感じ味わうこと、この両輪が機能する必要があるだろう。そのために、心理療法家は主題であるバウムの特徴をある程度知っておくべきだと思われる。主観と客観を通じて認められる一つの布置をできるだけ確に把握しようとするためには、開かれた姿勢を維持しつつ、こうした拠り所を持つことが有益だと考えられるためである。

そこで本研究は、主題バウムがそもそも一体どのような特徴を有するのかを、とりわけ、バウムが如何なる「ゆらぎ」の構造を備えているのかを、心理臨床に益する形で明らかにすることを目的とて行われた。なお、本研究では「ゆらぎ」を、変化すること／しないことの両面を含む「一方向的ではない表現の可能性としての幅」と定義する。

具体的には、歴史的・理論的検討を行い、調査からゆらぎの現象を記述して仮説を導き出した上で（第 1～3 章）、実施法（個別法 vs 集団法）、用紙（縦 vs 横、大 vs 小）、教示（2 枚目に「違う木」を指示）のそれぞれについて操作を加えた調査研究を行い、同一対象者のバウム表現に如何なるゆらぎが認められるかを捉えた（第 4～7 章）。さらに描画プロセスの検討も行った（第 7 章）。以上を総合し、バウム表現のどこが変化しやすい／しにくいのか、という観点からバウムのゆらぎの特徴を明らかにし（第 8 章）、総合考察を行うとともに臨床実践と研究活動への本知見の還元を論じた（終章）。

序章：準備的論考

本章では、筆者の個人的経験を記すことで、本研究全体の文脈を提示した。まず、バウムテスト技法の説明を行い、筆者の初めてのバウムテスト臨床体験を記した。そして、その体験とその後の研究から生じた、「心理療法家の技法習得においても実践においても、バウムという主題をより理解することが有益ではないか」との問いについて論じた。

第1章：日本における研究の概観

本章では、日本で報告された700編超の先行研究を、研究テーマと方法論から検討した。その結果、研究内容としては基礎研究や追試やレビューの不足などの問題があること、方法論では、数量化研究が主流であったにもかかわらず、指標の定義、数量化の信憑性、統計学的分析の誤用などの問題があると考えられた。最後に、今後の研究では、Kochの基本姿勢を導入しつつ、基礎研究と臨床研究を充実させることの意義を論じた。

第2章：「ゆらぎ」への着目と本研究のねらい

本章では、「ゆらぎ」という考え方を定義し、本研究の目的を明確化した。最初に、主題バウムの特徴を理解する試みは少なく、そのバウムには「ゆらぎ」の特徴があると論じた。この「ゆらぎ」は「一方向的ではない表現の可能性としての幅」と定義し、主題バウムの「ゆらぎ」の特徴の理解は、実践と研究で有意義な視点を提供すると考えられた。方法論としては、多数の指標を用いて網羅的に検討するスクリーニング法と、研究者の仮説から検討対象を絞るスポットライト分析の両メリット・デメリットを挙げ、それらを自覚しつつ用いていくことを確認した。

第3章：再検査信頼性と「ゆらぎ」の基礎データ

本章では、表現の安定性を保証する再検査信頼性の知見を再検討し、「ゆらぎ」の基礎データを収集した。調査対象は、異なる実施間隔で大学生にバウムテストを計2度実施する調査4種で、【同日群】は同日に連続で2度行った69名、【差込群】は同日に連続で2度行い、間に質問紙法を入れた68名、【1週群】は1週間間隔で2度行った42名、【3ヶ月群】は3ヶ月間隔で2度行った22名である。スクリーニング法から分析した結果、同じ条件で2度実施すると、約7割の対象者の描画は変化すること、その変化は4群間で統一的变化が無いこと、表現の安定性を示唆する結果が得られたものの同時に見逃しがたい変化があることが見出された。

第4章：実施法とバウムの「ゆらぎ」——幹表面の表現を考える

本章では、実施法（個別法と集団法）がバウム表現に与える影響を検討した。【実施法群】は大学生 48 名に対して個別法と集団法とでバウムテストを 2 度施行したデータである。幹表面の表現に焦点づけて分析した結果、個別法に比べ集団法で幹の表面に描写が多く、特にそれは樹皮を思わせる筋状の表現であることが明らかになった。この理由として、集団法が他者や環界から何がしかの影響を受ける場面であること、他者の描画終了を待つ時間が構造的に設けられることが考えられた。

第5章：画用紙とバウムの「ゆらぎ」——はみ出しの表現を考える

本章では、画用紙の特徴がバウム表現に与える影響を検討した。【縦横群】は大学生 32 名に A4 判の用紙を縦長と横長とで、【大小群】は大学生 33 名に A4 判と B5 判の用紙を縦長で、計 2 度のバウムテストを実施したデータである。はみ出しの表現に焦点づけて分析した結果、上方へのはみだし表現は環境（用紙）の影響を受けにくく、描画態度で変化すること、バウムが縦に長い特性を本質的に有することが示唆された。なお、描き手の態度とはみだし表現との関連は、バウムを成長させるよう教示に工夫を加えた【未来群】59 名のデータも加えて検討した。

第6章：教示とバウムの「ゆらぎ」——樹冠部の表現を考える

本章では、教示がバウム表現に与える影響を検討した。【操作小群】は大学生 48 名にバウムテストを通常の方法で実施した後、教示「今のは違う、実のなる木を描いてください」で 2 度目を実施したデータ、【操作大群】は大学生 54 名に通常の方法で実施して樹種を尋ねた後、教示「○○（樹種）を描いて下さいましたが、今度は違う形の○○を描いてください」で 2 度目を実施したデータである。枝と包冠線に着目して分析した結果、描き手に否定的態度を賦活する両群の 2 度目の表現で、枝の増加と包冠線の減少が認められたことから、樹冠部は描き手の能動的態度によって変化する形態部であることが示唆された。

第7章：描画プロセスと「ゆらぎ」——幹の表現を考える

本章では、描画プロセスからバウムの「ゆらぎ」の特徴を検討した。大学生 158 名の個別法実施結果を、バウムをどこから描き始めるか、幹はどのように形作られるか、に着目して検討した結果、描き手の約 8 割は幹から描き始め、約 6 割が「八の字」で幹を形成した。この結果より、幹は表現の拠り所・基点となる形態部であることが示唆された。

第8章：バウムの「ゆらぎ」の構造

本章では、バウムのどこか変化しやすく、どこが変化しにくいという「ゆらぎ」の構造を検討した。対象は大学生 475 名で、第 3～6 章で用いた全 10 群のデータ（同日群・差込群・1 週群・3 ヶ月群・縦横群・大小群・操作小群・操作大群・未来群）が検討の対象となった。スクリーニング法によってバウムを数量化し、全 10 群の結果をまとめると、図 1 に示す特徴が導き出された。「ゆらぎの広狭」における「広い」とは、変化しやすいことを意味し、「ゆらぎの規則性」における「低い」とは、状況依存性の低さを示す。本結果より、特に樹冠部と枝はゆらぎの程度が大きい形態部であるから、この部分の解釈には慎重であらねばならないことが示唆された。

		ゆらぎの規則性		
		高い	中程度	低い
ゆらぎ の広狭	狭い			幹の表面 根 実
	中程度			幹の構造 バウム以外
	広い	用紙用途 樹冠	枝の本数 枝の構造	描線

図 1 カテゴリーごとにみた“ゆらぎ”の特徴

終章：総合考察

本章では、得られた知見の総括、本知見による実践と研究への提言、研究の問題と課題を論じた。知見の総括は、「幹」「根」「枝」「樹冠」「用紙の配置」「全体」のカテゴリーごとに、バウムがどれほど変化しやすい／しにくいのか、そして変化が生じる場合は如何なる心性と関連しているのかまとめられた。特に、枝と樹冠と用紙の配置は変化しやすい形態部であることが本研究から示されたため、エヴィデンスを用いる解釈は慎重でなければならないことが示唆された。臨床実践と研究活動に関しては、「ゆらぎ」という視点と知見を一つのイメージとして考えていく意義と、解釈仮説の洗練においても「ゆらぎ」の視点が有用であることを論じた。研究の課題としては、個別事例において如何に「ゆらぎ」の視点が活用されるかに関する具体例から示せなかったこと、方法論において従来からの問題を乗り越えることができていないことが論じられた。